

十和田湖

泉鏡太郎

青空文庫

「さて何うも一方ならぬ御厚情に預り、少からぬ御苦勞を掛けました。道中にも旅店にも、我儘ばかり申して、今更お恥しう存じます、しかし俾、駕籠……また夏座敷だと申すのに、火鉢に火をかかん……で、鉄瓶の湯を噴立たせるなど、私としましては、心ならずも止むことを得ませんので、決して我意を募らせた不届な次第ではありません。——これは幾重にも御諒察を願はしう存じます。

——古間木（東北本線）へお出迎ひ下さつた以来、子の口、

やすみや
 休屋に掛て、三泊り。今また雑と一日、五日ばかり、私ども一
 行に對し……申尽くせませんまで、種々お心づかひを下さ
 いましたのも、たゞ御礼を申上げるだけでは済みません。御
 懇情はもとよりでございませが、あなたは保勝会を代表
 なすつて、湖の景勝頭揚のために、御尽力をなすつたの
 で、私が、日日社より旅費を頂戴に及んで、遙々と出
 向きましたのも、又そのために外なりませんのでございませから、
 見聞のまゝを、やがて、と存じます。けれども、果して御期待に
 かなひますか、如何か、その辺の処は御寛容を願ひたう存じま
 す。たゞしかし、湖畔五里余り、沿道十四里の間、路傍の花を
 損なはず、樹の枝を折らず、靈地に入りました節は、巻 蓑の

すいがら
吸殻は取つて懐紙へ——マツチの燃えさしは吹き消して、も
との箱へ納めましたことを憚りながら申し出でます。何は行届
きませんでも、こればかりは、御地に対する礼儀と真情でござ
います。」

「はあ——」

……はあ、とそつ気はないが、日焼けのした毛だらけの胸へ、
ドンと打撞りさうに受け容れらるる、保勝会の小笠原氏の—
—八月四日午後三時、古間木で会うてより、自動車に揺られ、
ふねも 大降小降幾度か雨に濡れ、おまけに地震にあつた、
すそみじか 裾短な白緋の赤くなるまで、苦労によれくの形で、黒
の信玄袋を緊乎と、柄の巖丈な蝙蝠傘。麦稈帽を

鷲掴みに持添へて、膝までの靴足袋に、革紐を堅くかゞつて、
 赤靴で、少々抜衣紋に背筋を膨らまして——別れとなれば
 お互に、峠の岐路に悄乎と立つたのには——汽車から溢れ
 て、風に吹かれて来た、木の葉のやうな旅人も、おのづから哀
 れを催し、挨拶を申すうちに、つい其誘はれて。……凶に乗つ
 たのでは決してない。……

「十和田の神も照覧あれ。」

と言はうとして、ふと己を顧みて呆れ返つた。このひげまだらまなこ
 つぶらおもあかへんさいの驍将に対して、爾き言を出さむには、
 円にして面赤き辺塞の驍将に對して、爾き言を出さむには、
 当時流行の剣劇の朱鞘で不可、講談もの、鉄扇でも不
 けな。せめては狩衣か、相成るべくは、緋緘の鎧……と気が

つくと、暑中伺ひに到来の染浴衣に、羽織も着ず、貝の口も横つちよに駕籠すれして、もの欲しさうに白足袋を穿いた奴が、道中つかひ古しの蟹目のゆるんだ扇子では峠下の木戸へ踞んで、秋田口の観光客を——入らはい、と口上を言ひさうで、照覧あれは事をかしい。

「はあ。……」

「え、しかし何は御不足でも医学博士、三角康正さんが、この一行にお加はり下すつて、篤志とまでも恩に着せず、少い徳本の膝栗毛漫遊の趣で、村々で御診察をなすつたのは、御地に取つて、何よりの事と存じます。」

「はあ、勿論であります。」

「それに、洋画家の梶原さんが、雨を凌ぎ、波を浴びて、船でも、巖でも、名勝の実写をなすつたのも、御双方、御会心の事と存じます。尚ほ、社の写真班の英雄、三浦さんが、自籠巖を駆け上り、御占場の鉄階子を飛下り、到る処手練のシヤターを絞つたのも、保勝会の皆様はじめ、……十和田の神……」

と言ひかけて、ぐつとつまると、白のづぼん、おなじ胴衣、身のたけ此にかなつて風采の揚がつた、社を代表の高信さん、傍より進み出で、

「では此で、……おわかれをいたします。」

小笠原氏は、くるり向直つて、拳手をしさうな勢ひで、

「はあ。」

これは、八月七日の午後、秋田県鹿角郡、生田を駕籠で上つて……これから三瀧街道を大湯温泉まで、自動車で一氣に衝かうとする、発荷峠、見返茶屋を、……なごりの湖から、向つて右に見た、三岐の一場面である。

時に画工——画家、画伯には違ひないが、何うも、画工さんの方が、分けて旅には親味がある（以下、時に諸氏に敬語を略する事を恕されたし。）貫五さんは、この峠を、もとへ二町ばかり、樹ぶり、枝ぶり山毛櫨の老樹の、水を空にして、湖の雲に浮いた、断崖の景色がある。「いゝなあ、この山毛櫨一本が、こゝで湖を支へる柱だ。」そこへ画架を立てた——その時、この

たふ滅ちび はおりはかま 峠を導いて、羽織袴で、阪へ掛かると股立を取つた観湖楼、
 わぬない ごしゆじん 和井内ホテルの御主人が、「あ、然やうで。樹木は一枝も大
 いせつ 切にいたさなければ成りませんな。素人目にも、この上り十
 ちやう 五町、五十六曲り十六景と申して岩端、山口の処々、い
 づれも交る／＼、湖の景色が変りますうちにも、こゝは一段と
 ぞん 存じました。さいはひ峠 たふげうへ 上の茶屋が、こゝへ新築をいたす
 のでございます。「背後の山 はいご 懐に、小屋を掛けて材木を組
 み、手斧が聞こえる。画工さんは立 たちどころ 処にコバルトの絵の具を
 と はかせむらさきてふ 溶いたし、博士は紫の蝶を追つて、小屋 こや うちの間道 かんだう を裏の林に
 はい ほんだう 入つたので。——あと四人は本道を休茶屋へ着くと、和井内
 しゆじん もくだち の主人は股立を解いて、別れを告げたのであつた。ちう（註。観

わんころう はおりはかま
湖楼の羽織袴は、特に私たちがのためではない、折から地方の頭
んくわん 官の巡遊があつた、その送迎の次手である。(

しやしんはん えいゆう すなは
写真班の英雄は、乃ちこの三岐で一度自動車を飛下り
りんかん てふ せうえう はかせ むか
て、林間の蝶に逍遙する博士を迎ふるために、馳せて後戻
りをした処である。――

かた／＼ やうす みなぼくわか
方々の様子は皆略分つた、いづれも、それ／＼お役者
である。が、白足袋だつたり、浴衣でしよたれたり、貝の口が横
しろたび ゆたか かひ くち よこ
つちよだつたり、口上を述べ損つたり……一体それは何も
こうじやう のべそこな たい なに
のだい。あゝそつとく私……です、拙者、拙者。

えいゆう うちら やうさう よこぶとり
英雄三浦の洋装の、横肥にがツしりしたのが、見よ、
まゆ うへ やま は あら
眉の上の山の端に頭はれた。三岐を目の下にして、例の間道

らしいのを抜けたと思ふが、横状に無理な崖をするりと這つて、
 自動車の屋根を踏踏ぐか、とドシンと下りた。汗ひとつつかい
 て居ない。尤も、つい此の頃、飛行機で、八景の中の上高地の
 空を飛んだと言ふから、船に乗つても、羽が生えて、ひらくくと、
 周囲十五里の湖の上を高く飛びさうでならなかつた。闊歩横
 行、登攀、跋涉、そんな事はお茶の子で。——

思へば昨日の暮前であつた。休屋の山に一座且聳えて巖
 山に鎮座する十和田神社に詣で、裏岨になほ累り累る嶮し
 い巖を爪立つて上つた時などは……同行した画工さんが、信の
 槍も、越の剣も、此を延長したものだと思へ、といったほど
 であるから、お恥かしいが、私にしては生れてはじめての冒険

で、足萎え、肝消えて、中途で思はず、——絶頂の石の祠は
 八幡宮にてましますのに、——不動明王、と念ずると、や
 あ、といふ掛声とゝもに、制迦の如く頭はれて、写真機と
 附属品を、三鈷と金剛杵の如く片手にしながら、片手で、帯
 を掴んで、短軀小身の見物を宙に釣つて泳がして引上げた英
 雄である。岩魚の大を三匹食つて咽喉を渴かすやうな尋常
 なのではない。和井内自慢のカバチエツポの肥つた処を、二尾塩
 焼きでペろりと平げて、あとをお茶漬さら〜で小楊子を使ふ。

……
 いや爰でこそ、呑氣らしい事をいふものゝ、磊々たる巉巖
 の尖頂へ攀ぢて、大菩薩の小さな祠の、たゞ掌に乗るばか

り……といった処で、人間のではない、毘沙門天の掌に据ゑ
 給ふ。宝塔の如きに接した時は、邪気ある凡夫は、手足もすく
 んでそのまゝに踞んだ石猿に化らうかとした。……巖の層は一
 枚づつ、巖かなる、神将の鎧であつた、謹んで思ふに、色気
 ある女人にして、悪く絹手巾でも捻らうものなら、たゞ翻
 々と木の葉に化して飛ぶであらう。それから跣足になつて、抱
 へられるやうにして下つて、また、老樹の根、大巖の挟間を
 ひだり五段、白樺の巨木の下に南祖坊の堂があつた。右に三
 段、白樺の巨木の下に、一龍神の祠があつた。……扉浅う
 して、然も暗き奥に、一個人面蛇体の神の、軀を三畝り、尾
 と共に一口の剣を絡うたのが陰影に立つて、面は剣と、もに真

つあを
青なのを見た時よ。

二

この祠を頂く、鬱樹の梢さがりに、瀧窟に似た径が通つて、
断崖の中腹に石榴りの巖僅に拓け、直ちに、鉄の階子が架
る、陰々たる汀こそ御占場と称するので——（小船は通るさ
うである）——画工さんと英雄とは、そこへ——おのおの……
畠山の馬ではない、……猪を抱き、鹿をかつぐが如き大荷の
まゝ、ずるゝと梢を沈んだ。高信さんは、南祖坊の壇の端
に一息して向うむきに煙草を吸つた。私は、龍神に謝しつゝも、

おほしらかば みきすが 大白樺の幹に縋つて、東が恋しい、東に湖を差覗いた。

ばしよ 場所は、立出でた休屋の宿を、さながら谷の小屋にした、中

かやまはんたう はんたう 山半島——此の半島は、恰も龍の、頭を大空に反らした

かたち 形で、居る処は其の腮である。立てる絶壁の下には、御占場

がけ の崖に添つて業平岩、小町岩、千鶴ヶ崎、蝋燭岩、鼓ヶ浦

と詠続よみつゞいて中山崎の尖端とつさきが牙きばである。

あひたちむか 相対向ふものは、御倉半島。また其の岬を大蛇灘が巻い

て、めぐつて、八雲崎、日暮崎、鴨崎、御室、烏帽子岩、

べうぶい 屏風岩、つるぎい 剣岩、一つ一つ、神が斧を打ち、鬼が、鉞を下し

た如く、やがては、巨匠、名工の、鑿鑿の手の冴さえに、

なみ 波の珠玉を鏤め、白銀の雲の浮彫を装ひ、緑金の象

うがん 嵌めに好木奇樹かうぼくきじゆの姿すがたを凝こらして、粧壁彩巖しやうへきさいがんを刻きぎんだのが、

一目めである。

をり

折あめから雨のあとの面打沈おもてうちしづめる蒼々さうくまんく漫まんく々くたる湖は、水

なそこ つき かげ す

底そこに月の影を吸すはうとして、薄うすく輝かぎ渡わたつて、沖おきの大蛇灘おろちなだを

ゆふひかげ はし 夕日影ゆふひかげが馳はしつた。

ふたゝ

再びふたゝ云いふ、東ひがしむか向むかうに、其八雲そのくも、日暮崎くれのさき、御室みむろの勝しょうに並なら

で半島はんたうの真中まんなか一処ところ、雲くもより汀すべつて湖みづうみに浸ひたる巖壁がんべき一丈ぢやう、頂ぢやう

の松まつは紅日こうじつを染そめ、夏霧なつぎりを籠こめて紫むらさきに、半なかば山肌やまはだの土緒つとあかく、

汀みぎはは密樹みつじゆ緑林りよくりんの影濃かげまやかに、此この色いろ三さんつを重かさねて、ひたくと

映うつつて、藍あゐを浮うかべ、緑みどりを潜ひそめ、紅くれなゐを溶とかして、寄よる波なみや、返かへす風かぜ

に、紅紫千輪こうしりんの花はな忽たちまち敷しき、藍碧万顆らんぺきばんくわの星ほたちま倏ひらち開ひらいて、颯さつと

に、

に、

に、

に、

なが
流るゝ七彩さいの虹にじの末すゑを湖心こし最も深ふかき処ところ、水深すゐん一千二百尺しやくの青せい龍りゆうの偉おほいなる暗くらき口くちに呑のむ。

それが、それが、目めの下したにちらくくと、揺ゆれに、揺ゆれる。……

よるとばり
夜の帳せまはやゝ迫せまる。……あゝ、美うつくしさに気き味みが悪わるい。

そこに、白鳥はくてうの抜羽ぬけは一枚ひら、白帆しらほの船ふねありとせよ。 蝸まい牛いつぶろ

の角つのを出だして、櫓ろを操あやつるものありとせよ、青あを 蝨いなごの流ながるゝ如ごとき

発動はつどう汽艇きていの泳およぐとせよ。

わたしなん
私わたしは何なんとなく慄ぞつ然ぜんとした。

みづうみ
湖みづうみばかり、わればかり、船ふねは一艘そうの影かげもなかつた。またいつも

影かげの形かたちに添そふやうな小笠原をかさはらし氏しのゐなかつたのは、土地とちの名物めいぶつと

て、蕎麦切そばきりを夕餉ゆふげの振舞ふるまひに、その用意よういに出向でむいたので、今頃いまごろ

は、手を貸して麵棒に腕まくりをしてゐやうも知れない。三角
 さんは、休屋の浜ぞひに、恵比寿島、弁天島、兜島を、
 自籠の岩——（御占場の真うしろに当たる）——掛けて、ひと
 りで舟を漕ぎ出した。その間に、千年の杉の並木を深く、私たち
 は参詣したので。……
 すなはやまの背面には、岸に沿ふ三角さんの小船がある。たゞそ
 の人が頼りであつた。少々怪我ぐらゐはする覚悟で、幻覚、
 錯視かと自ら怪しむ、その水の彩りに、一段と、枝にのびて乗出
 すと、余り奇麗さに、目が眩んだのであらう。此の、中の湖の一
 面が雨を呼ぶやうに半スツと薄暗い。
 ために黒さに艶を増した烏帽子岩を頭に、尾を、いまの其の色

の波なみにして、一筋すぢ。御占場おうらなひばの方ほうを尾をに、烏帽子岩えぼしいはに向つて、一筋すぢ。うねくと薄うすく光ひかる水二条みづ すぢ、影かげも見えない船脚ふなあしの波なみに引ひきの残こされたやうなのが、頭丸あたままるく尖とがり胴長どうながくうねり、脚二つあしに分わかれて、たとへばこれ（号ごう）が横よこの（八はち）の字じに向合むかひあつて、湖の半みづうみを領なつかげして浮うかび出でた、ものゝ形かたちを見よ。——前日ぜんじつ、子の口くちの朝あさの汀みぎはに打ち群むるゝ飴色あめいろの小蝦こえびの下したを、ちよろくと走はしつた——真黒まつくろな蠨螋あもりに似にて双ふたつながら、こゝに其その丈十丈たけぢやうあまに余あまぬる。
 見るみく、其その尾震をふるひ、脚蠢あちごめき、頭動あたまごく。……驚破すはや、相噛あひかまば、戦いくさはゞ、此波湧このなみわき、此巖崩このいはくづれ、われ怪けし飛とぶ、と声こゑを揚あげて「康正かうせいさーん。」博士はかせたすけよ、と呼ばよむとする時とき、何なんと、……頸寄うなじより、頬重ほのおもり、脚抱あしだくと視みるや、尾をを閃ひらめかして接吻キッスをした。

風かぜと、もに黒くろい漣さざなみが立たち蔽おほつた。

「——占うらなは……占うらなは——」

罅こだまに曳ひいて、崖がけ下したの樹きの中なか、深ふかく、画工ゑかきさんの呼よぶのが聞きこえて、

「……凄すごいぞう。」

と、穴あなに籠こもつたやうな英えい雄ゆうの声こゑが暗くらい水みづに響ひびいた。

「やあ、これは。」

高たか信のぶさんが、そこへ、ひよつくり頭あはれた、神かん職ぬしらしいのに挨あい拶さつすると、附つき添そつて来きた宿屋やどやの番頭ばんとうらしいのが、づうと出でて、

「今いまこれへ、おいでの皆みな様さまは博は士かせの方かた々々、でおいでなさりま

するぞ。」

十四五人、仙台の学校からと聞く、洋服の紳士が、ぞろぞろと続いて見えた。……

——のであつた。——

時に英雄が発荷峠で……

「博士は、一車あとへ残らるゝさうです。紅立羽、烏羽揚羽、

黄と白の名からして、おつにん蝶、就中、（小紫）など

といふのが周囲についてゐますから、一寸山から出さうにもあ

りませんな。」

——この言は讖をなした。翌々夜の秋田市では、博士を蝶の取

りまくこと、大略斯の通りであつた。もとより後の話である。

わたし
私はいった。

「蝶々てふくの診断しんだんをしてゐるんだ。大湯おほゆで落合おちあひましやうよ、一

足あしさきへ……」

……実は三日余かあまり、仙境せんきやうれいち靈地しんしんに心身共ともに澄切すみきつて、澄切すみき

つた胸むなさきへ凡俗ぼんぞくの氣きが見透みえすくばかり。そんなその、紅立羽あかたては

だの、小紫こむらさきだの、高原かうげんの佳人かじん、お安やすくないのにはおよばな

い、西洋化粧せいやうけしやうの化粧げけむらさき、紫むらさき、ござんなれ、白粉おしろいの花はなありがた

い……早く下界げかいへ逃げたいから、真先まつさきに自動車じどうしやへ。

駕籠かごを一挺ちやう、駕籠屋かごやが四人にんたふげ、峠たふげの茶屋ちややで休やすんだのが、てくく

と帰かへつて来たき。

「いや、取紛とりまぎれて失念しつねんをしようとした。ほんの寸志すんしだよ。」

高信たかのぶさんが、銀貨ぎんくわを若干なにがし、先棒さきぼうの掌てのひらへポンと握にぎらせる
と、にこりと額ひたいをうつむけた処ところを、

「いくら貰もらうたかい。」

小笠原をがさはらし氏が、真顔まがほで、胡麻髻ごまひげの頬ほを寄よせた。

「へい。」と巖がんぢやう丈ひんにぎに引握おほつた大きな掌てのひらをもつさりと開あける、
と光ひかる。

「多おほからうが。多おほいぞ。お返かへし申まをせ。——折角せつかくですが、かやう
な事ことは癖くせになりますで、以来いらい悪例あくれいになりますでな。」

お律義りちぎお律義りちぎ、いつもその思おほしめし召ねがで願ねがひたい、と何どの道みち此こ処こ
は自腹じばらでないから、私わたしは一人ひとりで褒ほめてゐる。

「いや、それはそれ、これはこれ、たゞ些少ほんこゝろざしの志こころざしですから。

……さあく、若い衆、軽く納めて。」

馴れて如才ない扱ひに、苦つた顔してうなづいて、

「戴いて置け。札を言へい。」

「それ、急げ。」

英雄は、面倒くさい座席になど片づくのでない。自動車

も免許取だから、運転手台へ、ポイと飛び上ると、「急げ

。」——背中を一つ引撲く勢ひだから、いや、運転手の飛ば

した事。峠から下す風は、此の俗客を吹きまくつた。

「や、お精が出ますなあ。」

坂の見霽で、駕籠が返る、と思ひながら、傍目も触らなかつ

た梶原さんは、——その声に振り返ると、小笠原氏が、諸肌

ぬぎになつて、肥腹ふとつばらの毛けをそよがせ、腰こしに離はなさなかつた古ふるて手拭ぬぐひを頸くびに巻まいた。が、一役やくす済すまして、ほつと寛くつろいだ状さまだつたさうである。「さすがに日ひ当あたりは暑あついですわい。」「これから何方ちちまでお歸かへりです。」「法奥はふおく沢さはむら村むらの名望めいぼう家が、船ふねさ出でれば乗のるのですがな、都合つがふさ悪わるければ休屋やすみやまで歩行あるきますかな。月つきがありますで、或あるは陸路りくろを子ねの口くちへ歸かへるですわい。」「合あはせて六里りよ余よ、あの磯げうかくたる樵路きこりちを、連つれもなく、と思おもふと、三角すだんせ先せん生いに宜よろしく、と挨拶あいさつして、ひとり登けいぜん然ぜんとして峠たふげを下くだる後うしろつ態きの、湖みづうみは広くわうだい大だい、山毛ぶな樗なは高たかし、遠見とほみの魯智深ろちしんに似にたのが、且軍敗かくきやぶれて、鎧よろひを棄すて、雑兵ざうひやうに紛まぎれて落おちて行ゆく宗任むねたふのあはれがあつた。……とその夜よ、大湯おほゆの温泉をんせんで、おしろひの花はなに

も似ないなつぱ菜葉なつぱのやうなのにしやくく酌しやくくをされつゝ、ゑかき画家ゑかきさんがわたし私わたしたちにはな話はなしたのであつた。

——却説さて前段ぜんだんに言つた。——かいがんせん海岸線かいがんせんまはりのきふかうれつしや急行列車きふかうれつしや
こまきが古間木こまきへ（こ此このえき駅えきへはわだ十和田はんじやう繁はんじやう 昌ことしのためにきふかう今年きふかうからきふかう急行きふかう
ていしやがはじめていしやて停ていしや車ていしやするのださうでさうで。——つ着ついたとき時とき、たび旅行たびにけいけ経けいけ
ん験んのすくな少すくないうちき内気うちきものゝあはあはれささは、てちか手近てちかなところ所ところをひきくら引較ひきくらべる……一ちよ
つといづ寸伊豆おほひとのおほひと大仁おほひとと言いつたき気がしたしたのである。が、な菜なのはな花はなやすすき薄すすきの
うへ上うへをすらすらすらすらと、しゆぜんじすぐにしゆぜんじ修善寺しゆぜんじへついでついて、あやめのゆ菖蒲湯あやめのゆにだ抱だかれる
やうなやうな、やさ優しいやさいのではない。えき駅えきをみぎ右みぎに出でると、こころほそもうこころほそ心こころほそ細こころほそいほ
げんやど、げんや原野げんや荒こうばく漠こうばくとして、なん何なんともみな見馴みなれない、ちぎ断ちぎれぐも雲ぐもが、だ大だ円だの
そら空そらをと飛とぶ。八ぱうさ方ぱうさ草ぱうさばかりで、さへぎ遮さへぎるものはないから、じどうしや自じどうしや動じどうしや車じどうしやはなみ波なみ

を立て、砂に馳しり、小砂利は面を打つ凄じさで、帽子などは被
 つて居られぬ。何、脱げば可さうなものだけれど、屋根一つ遠
 くに見えず、枝さす立樹もなし、あの大空から、遮るものは唯
 麦藁一重で、赫と照つては急に曇る……何うも雲脚が気に入
 らない。初見の土地へ対しても、すつとこ被りもなるまいし：
 ……コツツンと音のするまで、帽子の頂辺を敲いて、嵌めて、
 「天気模様は如何でせうな。」「さあ——」「降るのは構ひませ
 んがね、その雷様は——」小笠原氏は、幌なしの車に、横ざ
 まに背筋を捻ぢて、窓に腰を掛けたやうな形で飛び飛び、「昨日
 一昨日と三日続けて鳴つたです、まんづ、今日は大丈夫だが
 せうかな。」一行五人と、運転手、助手を合はせて八人犇と

揉もんで乗のつた、真ま中なかに小ちさくひなつた、それがしの顔が色ん少しか
 らず憂い鬱うになつたと見みえて、博は士かせが、肩かへ軽かるく手てを掛かけるやう
 にして、「大だい丈ぢ夫やうぶですよ、ついで居ゐますよ。」熟つ々らく案あんずれば、
 狂き言やうげんではあるまいし、如いか何かに名め医いといつても、雷らい神じんを何どう
 しようがあるものではない。が、面めん食くらつて居ゐるから、この声こゑに、
 ほつとして、少すこしばかり心こゝろが落おち着ついた。
 落おち着ついて見みると……「あゝ、この野の中なかに、優いにやさしい七た夕なばた
 が……。」「又また慌あわてた。丈たけより高たかい一めん面めんの雑ざつ草さうの中なかに、三み本もと、五
 つもと本なまた七な本もと、淡あい紫はの露むらの流らるゝばかり、且かつ飛とぶ処ところに、莖くき
 高たかい見み事ごとな桔き梗きやうが、——まことに、桔き梗きやう色いろに咲さいたのであつ
 た。

さん 去ぬる年、としか なかいづみ 中泉から中尊寺に詣でた六月のはじめには、
 さいりう 細流に影を宿して、やまぶき 山吹の花の、かた かひ きざ 堅く貝を刻めるが如く咲い
 たのを見た。み 彼は冷き黄金である。これ あたゝ 此は温かき瑠璃である。此
 のひ 日、ほんせん 本線に合してがつ 仙台せんだい台をすぐる頃から、まぢ 町はもとより、野の
すゑ 末の一軒家、ふもと 麓の孤屋の軒に背戸に、かき 垣に今年竹の真青なのに、
しき 五色の短冊、いろ 七彩の糸を結んで掛けたのをしみ 沁々ゆかと床しく見
 た、さつき 前刻の今で、ききやう 桔梗は星の紫の由縁であらう。……時になび 靡き
くも かゝる雲の幽なるさへ、てん 一天の銀河にはうふつ 髣髴として、しか 然も、か 八甲
ふださん 田山を打蔽ふ、みちのく 陸奥の空は寂しかった。

われらは、ともすると、雲に入つて雲を忘るゝ……三本木は、
やなぎだくにを 柳田国男さんの雑誌——ぎつし（郷土研究）と、ちか 近くまたきやう（郷

土会記録どくわいきろく）とに教をしへられた、伝説でんせつをさながら事実じじつに殆ど奇蹟きせき的てきの開墾地かいこんちである。石沙無せきさむにん人の境きやうの、家いへとなり、水みづとなり、田たとなり、村むらとなつた、いま不思議ふしぎな境きやうにのぞみながら、古間木こまきよりして僅わづかに五里ごり、あとなほ十里じりをひかへた——前途ゆくての天候てんこうのみ憂慮きづかはれて、同伴つれに、孫引まごひきのもの知り顔がほの出来できなかつたのを遺憾あかんとする。

八人にんでは第一だい乗溢のりこぼれる。飛ぶ輻とやの、あの勢いきほひで溢こぼれた日ひには、魔夫人まふじんの扇あふぎを以て煽あふがれた如ごとく、漂々へうくとうく、蕩々とうとうとして、虚空こくうに漂たゞよはねばなるまい。それに各荷おのへが随分ずぶんある。恚かくいふ私わたしにもある。……大きなバスケットがある。読者どくしゃ知るや、葶とんさんと芥あ川か（故こ……あゝ、面影おもかげが目めに見える）さんが、然しかも今年五ことし

ぐわつとうほく 東北を旅した時、海を渡つて、函館の貧しい洋食店

で、亭さんが、オムレツを啣んで、あゝ、うまい、と嘆じ、

返返る身に沁々、とほつき貝

と、芥川さんが詠じて以来、——東京府の心ある女連

は、東北へ旅行する亭主の為に鰹のでんぶと、焼海苔と、梅

干と、氷砂糖を調へることを、陰膳とゝもに忘れない事に

成つた。女に心があつてもなくても、私も亭主の一人である。

そのでんぶ、焼海苔など称ふるものをしたゝか入れた大バスケツ

トがあるゆゑんである。また不断と違ふ。短軀小身なりと雖も、

かうして新聞から出向く上は、紋着と袴のたしなみはなくて

なるまいが、酔つ払つた年賀でなし、風呂敷包で背負ひもなら

ずと、……友だちは持つべきもの、緑蝶夫人といふ艶麗な
 が、麴町通り電車道を向うへ、つい近所に、家内の友だ
 ちがあるのに——開けないと芬としないが、香水の薫りゆかし
 き鬢の毛ならぬ、衣裳鞆を借りて持った。
 次に、御挨拶を申したい。此の三本木の有志の方々か
 ら、こゝで一泊して晚餐と一所に、一席の講話を、とあつたのを、
 平におわびをしたのは、……かるがゆゑに袴がなかつた為ではな
 い。講話など思ひも寄らなかつたからである。しかし惜しい事を
 した。いま思へば、予て一本を用意して、前記（郷土会記録）
 載する処の新渡戸博士の三本木開墾の講話を朗読すれば可
 った。土地に住んで、もう町の成立を忘れ、開墾当時の測

量器具などの納めた、由緒ある稲荷の社さへ知らぬ人が多か

らうか、と思ふにつけても。

ひと

人と荷を分けて積むため、自動車をもう一台たのむ事にして、

幅十間と称ふる、規模の大きい、寂びた町の新しい旅館の玄

関前、広土間の卓子に向つて、一休みして巻

ながら、ふと足元を見ると、真下の土間に金魚がひらひら

と群れて泳ぐ。寒国では、恚うして炉を切つた処がある。これ

は夏の待遇に違ひない。贅沢なものだ。昔僭上な役者

が硝子張の天井に泳がせて、仰向いて見たのでさへ、欠

所、所

所、所

所、所

所、所

所、所

所、所

止せばいゝのに、

——それでも草履は遠慮したが、

雪靴を穿

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

いた奥山家の旅人の気で、ぐい、と踏込むと、おゝ冷い。ば
ちやんと刎ねて、足袋はびつしより、わアと椅子を傾けて飛上
ると、真赤になつて金魚が笑つた。あはは、あはは。
いや、笑事ではない。しばらくして——東は海を限り、北
は野辺地に至るまで、東西九里、南北十三里、周圍十六里。
十里まはりに笠三蓋と諺にも言ふ、その笠三蓋とても、夏は水の
ない草いきれ、冬は草も見ぬ吹雪のために、倒れたり、埋れたり、
ゆくへ行方も知れなくなつたと聞く。……三本木原の真中へ、向
風と、轍の風に吹放された時は、沖へ漂つたやうな心細
さ。

早く、町を放れて辻を折れると、高草に遙々と道一筋、

十和田に通ふと聞いた頃から、同伴の自動車が続かない。私は先へ立つたが、——説明を聞くと、砂煙がすさまじいで、少くとも十町あまりは間隔を置かないと、前へ進むのはまだしも、後の車は目も口も開かないのださうである。——この見果てぬ曠野に。

果せるかな。左右見渡す限り、苜蓿の下臥す野は、南部馬の牧場と聞くに、時節とて一頭の駒もなく、雲の影のみその幻を飛ばして一層寂しさを増した……茫茫たる牧場をやゝ過ぎて、道の弧を描く処で、遠く後を見返れば、風に乗つた友船は、千筋の砂煙をかぶつて、乱れて背状に吹きしなつて、恰も赤髮藍面の夜叉の、一個水牛に化して、苜

宿しの上うへをころ転きげき来きたるごと如ごとく、ものすさま凄まじのぞく望ぞまれた。

三

前ゆくて途り七り里やけ焼やま山ちやみせの茶つ店つにわ着わいて、少しば時らくするまで、このとも友ぶ

船ねは境さかひをへだ隔へだてたやうに別わかれたのである。

道みちはおほ大うね畝ねりに、乗のり上あがり乗のり下さがつて、やがて、野のはせま迫せまり、山やま

来きたり、いは巖か近かづき、川かは灌そいで、やつと砂すな煙けぶりの中なかをぬ抜ぬけたあたり

から、心こゝろ細ほそさが又また増ました。樹きはみどりいま緑ろに、流ながはしろ白しろい。嵐らん気き滴た

る、といふ癖くせに、何なにが心こゝろ細ほそい、と都とく会わいの極ごく暑しよに悩なやむ方か

々たからは、その不ふ足そくらしいのをおしかりになるであらうが、

行向ふ、正しやうめん面に次第しだいに立たち累かさなる山やまの色いろが真暗まつくらなのであ
る。左右さいうの山やま々々くは、次第しだい次第しだいに、薄墨うすずみを合せ、鼠ねずみを濃こくし、
紺こんを流ながし、峰みねが漆うるしを刷はく。

「さあくさあ、そろく怪あやしくなりましたな。」

「怪談くわいだんですか。」

「それ処どころですか、暗くらく成なつて来きましたなあ、鳴なりさうです
ね。鳴なりさうですな。」

みすみ
三角みすみさんが、

「大丈夫だいぢやうぶ、よく御覧ごらんなさい、あの濡ぬれたやうに艶つや々と黒くろくす

ごい中なかに……」

小笠原をがさはらし氏が口くちを入れて、

「あの中なかが、これから行く奥入瀬おいらせの大溪流だいけいりゅうでがすよ。」

だから、だからいはぬ事ことではない、私わたしは寒気さむけがして来たき。

「いゝえ、——黒く凄くろい中すごに、薄うすく…光ひかる…は不可いけませんか。」

と博士はかせが莞爾につこりして、

「黒く凄くろい中すごに、紫むらさき色いろが見みえましましやう。高山かうざんは何処どこもこの

景色けしきです。光くわうせん線せんの工合ぐあひです。夕立雲ゆふだちぐもではありませぬ。」

白はく皙せき蒲柳ほりうの質しつに似にず、越えつちう中国ちゆうごく立山たてやま、劍ヶ峰つるぎみねの雪ゆきを、先せ

頭んとう第四十だいじゅうし何人なんにん目めかに手鉤てかぎに掛かけた、登山とざんにおいては、江戸えどの

消防夫ひけしほどの挟勢きはひのある、この博士はかせの言ことを信しんずると、成程なるほど、夕ゆ

立雲ふだちぐもが立籠たちこめたのでもなさゝうで、山嶽さんかくの趣おもむきは墨染すみぞめの法こ

衣ろもを襲かさねて、肩かたに紫むらさきの濃こい袈裟けさした、大聖僧だいせいそうの態たいがないでもな

い。が、あゝ、何となくぞくぞくする。

忽ち、ざつとなつて、ポンプで噴くが如く、泥水が輪の両

方へ迸ると、ばしやんと衣裳鞆に匆ねかゝつた。運転

手台の横腹へ綱を掛けて積んだのである。しまつた、借りも

のだ、と冷りとすると、ざつ、ざぶり、ばしやツ。弱つた。が、

落着いた。緑蝶夫人の貸し振を思へ。——「これは、しやぼん、

鰹節以上ですな。——道中損ずる事承合ですぜ。」

「鞆は汚れたのが伊達なんですとさ。——だから新しいのを。何

うぞ精々傷めて来て下さいな。」最う一つ落着いたのは、：

…夏の雨だ。こゝらは最う降つたあとらしい、と思つたのである。

「小笠原さん、降つたんですね。」

「いや、昨日きのふの雨あめですわい。」

御勝手ごかつてになさい、膠にかのないこと夥おびたしい。然さやうでございませう

とも、成なる程ほど晴れたのではない。窓まどをたよるほど暗くらさが増まして気き

滅めい入いる事こと又また夥おびたしい。私わたしは家いえが恋こひしくなつた。人間にんげん女によう房ぼうの

恋こひしく成なるほど、勇気ゆうきの衰おとろへる事ことはない。それにつけても、それ、

その鞆かばんがいたはしい。行やつた、又またばしやり、ばしやん。

以もつて、この辺あた既にすでに樹木じゆもくの茂しげれる事こと思おもふべし。焼山やけやまは最もう近ちか

い。

近ちかい。が焼山やけやまである。唐黍たうもろこしも焦こげてゐやう。茄子なすびの実みも

赤あかからう。女をんな氣なげに遠とほざかる事こと、鞆かばんを除のぞいて十里りに余あまつた。焼やけ

山まについて休やすんだ処ところで、渋茶しぶちやを汲くむのはさだめし皺しわくたの…

：然ういへば、来る道の阪一つ、流を近く、崖ぶちの捨石に、
 竹杖を、ひよろくと、猫背へ抽いて、齢、八十にも余んなむ、
 卒塔婆小町を正で見ると、婆さんが、ぼやり、うつむいて休んでゐた。
 そのほかに殆ど人影を見なかつたといつても可い。——あんな
 のが「飲ましやい。」であらうと観念したのであつたから。

「今日は——女房さん。」

珊瑚の枝を折つてゐた、炉の焚火から、急いで立つて出迎へた、
 もの柔かな中形の浴衣の、髪の濃いのを見た時は、慌てたや
 うに声を掛けた。

焼山の一軒茶屋、旅籠に、雑貨荒物屋を兼ねた——土間に、
 (この女房さんなら茶も熱い) ——一椀を喫し、博士たちと一息

して、まはりの草の広場を、ぢつと視ると、雨空低く垂れつゝ、
 くもくろかみの如く野に捌けて、棟を絡ひ、檐に乱るゝとゝもに、
 雲は黒髪くろかみの如く野のに捌さばけて、棟むねを絡まとひ、檐のきに乱みだるゝとゝもに、
 向うの山裾やますそに、ひとつ、ぽつんと見える、柴小屋しばこやの茅屋根かややねに、
 うすあめあしがか掛かかつて、下草したぐさに裾すそをぼかしつゝ歩行あるくやうに、
 薄く雨脚あめあしが掛かかつて、次第しだいに此方こちらへ、百条もくすぢとなり、千条すぢと成なつて、やがて軒前のきまへに白
 い簾すだれを下おろした。

この雫しづくに、横頬よこほを打うたれて、腕組うでぐみをして、ぬい、と立たつた
 のは、草鞋わらぢを吊つつた店の端近みせはぢかに踞しやがんだ山漢やまをとこの魚売うをうりで。三枚まい
 の笹ざるに魚鱗うろこが光ひかつた。鱗うろこは光ひかつても、其それが大蛇だいじやでも、此この静しづか
 な雨あめでは最もう雷いなびかり光かりの憂慮きづかひはない。見参けんさん、見参けんさんなどゝ元氣げんき
 づいて、説明せつめいを待まつまでもない、此この山深やまふかく岩魚いはなのほかは、

予て聞いた姫鱒にておはすらむ、カバチエツポでがんせうの、
と横歩行きして見に立つ勢ひ。序にバスケットを探つて、緑蝶
夫人はなむけする処のカクテルの口を抜いた。

「凄い婆さんに逢ひましたよ。」

「大雨、大雨。」

と、画工さん、三浦さんがぼたくと出た、その自動車じどうしやが、柴
小屋ぼこやを小さく背景はいけいにして真直まつすぐに着くと、吹降ふきぶりを厭いとつた私わたした
ちの自動車じどうしやも、じりりと把手ハンドルを縦たてに寄つた。並んだ二台ならに、
頭あたまからざつと浴あびせて、軒のきの雨あめの篠しのつくのが、鬘たてがみを敲たたいて、轡くつわづ
頭らを高く挙げた、二頭とうの馬うまの鼻はなばしら柱そに灌そぐ風情ふぜいだつたのも、
谷たにが深い。

が、驟雨しゅううの凄すさまじさは少すこしもない。すぐ、廻まはり縁ゑんの座敷ざしきに、畳たたみ
 屋やの入はいつてゐたのも、何なんとなく心こころゆく都みやこの時雨しぐれに似にて、折をりから
 縁ゑんの端はしにトントンと敲たいた莫ご塵ごから、幽かすかに立たつた埃ほこりも青あをい。
 はじめよりして、ものゝ可なつか懐かしかつたのは、底そこ暗くらい納戸なんどの炉ろ
 に、大鍋おほなべと思おもふのに、ちら／＼と擲からんで居ゐる焚火たきびであつた、こ
 の火ひは、車くるまの上うへから、彼かしこ処こに茶屋ちややと見みた時ときから、迷まよつた深山みやま路ぢの
 孤ひとり屋つやの灯とものやうに嬉うれしかつた。女房にようぼうの姿すがたに優やさしかつた。
 壁かべ天井てんじやう、煤すすのたゞ黒くろい中なかに、火ひは却かへつて鮮あざやかである。この
 棟むねにかゝる蔦つたはいち早はやくもみぢしよう。この背戸せどの烏からすり瓜うりも先さき
 んじて色いろを染そめよう。東とう京きやうは遥はるかに、家いへは遠とほい。……旅たびの单衣ひとへ
 のそゞろ寒さむに、膚はだにほの暖あたかさを覚おぼえたのは一杯ぱいのカクテルばか

りでない。焚火は人の情である。

ひらくくと揚がり、ひらくくと伏して、炉に靡く。焚火は襷の

桃色である。かくて焼山は雨の谷に美しい。

ひそかに名づけて、こゝを村雨茶屋といはうと思つた。小降

りになつた。白い雲が枝に透く。

「何を煮てゐなさるんですか、女房さん。」

出立つ時、私は、納戸のその鍋をさしてきいた。

「はい？」

「鍋に何を煮なさいますか。」

「小豆でございます。」

と言ふと、女房は容子よく、ぽつと色を染めた。

わたし
私はその理由を知らない。けれども、それよりして奥入瀬川おいらせがはの
深林しんりんを穿うがつて通とほる、激流げきりう、飛瀑ひばく、碧潭へきたんの、到いたる処ところに、松たいま
明つの如ごとく、灯ともの如しびごとく、細ほそくなり小ちひさくなり、また閃ひらめきなどして、
——子ねの口くちの湖畔こはんまでともなつたのは、この焚火たきびと、——一くき茎きの
釣舟草つりぶねさうの花はなのあつたことを忘わすれない。

「しばらく、一寸ちよいと。」

焼山やけやまを一町ちやうばかり、奥入瀬口おいらせぐちへ進すすんだ処ところで、博士はかせが自動車じどうしや
を留とめていつた。

「あの花はなを知しつてゐなさいますか——一寸ちよいと、お目めに掛かけませう。」
自動車じどうしやを引ひ戻もどし、ひらりと下おりるのに、私わたしも続つづくと、雨あめに
ぬれた草くさの叢むらに、優やさしい浅黄あさぎの葉はを掛かけて、ゆらくと咲さいたの

は、たをやめのこゆびのせりづるの折鶴を乗せよう、おなじく折つた
ちひのうすきいろのふねの形に連り咲いた花である。「一枝」と意を
 小さな薄黄色の船の形に連り咲いた花である。「一枝」と意を
 う得ると、をがきはらしの顔を出して、事もなげに頷くのを見て、折り
 と取る時、瀬の音が颯と響いた。

やがて交る／＼手に翳した。

釣舟草は浮いて行く。

たちまみ、くるまの輻は銀に、轍は緑晶を捲いて、水が散つた。
 忽ち見る、車の輻は銀に、轍は緑晶を捲いて、水が散つた。
 おいらせがは奥入瀬川の瀬に入つたのである。

これよりして、子の口までの三里余は、たゞ天地を綾に貫いた、
きのいはと石と流の洞窟と言つて可い。雲晴れても、雨は不断に
 樹と巖と石と流の洞窟と言つて可い。雲晴れても、雨は不断に
 降るであらう。檜、桂、山毛櫨、檜、槻、大木大樹の其の齡

幾干なるをいづく知れないのが、せんたい蘚苔、らてう蘿蔦を、しやくどう烏金に、せいど青
う銅に、れんてつ錬鉄に、きぎ刻んで掛かけ、い鑄て絡まとうて、さいう左右も、ぜんご前後も、
もり森は山を包み、やま山は巖をたけ、いは巖はけいりう溪流を穿ち来る。……
いろ色をいほはた五百機の碧あをみどり緑に織おつて、ぬれいろ濡色の艶透つやすきとほ通る薄日うすひの影
うちは——裡なに何を棲すますべき——おほい大なる琅玕らうかんの柱はしらを映うつし、いだ抱くべ
めぐく繞るべきひする翡翠の帳とぼりの壁かべを描えがく。
かべこの壁はしら柱せいざは星座そびに聳え、はくうん白雲またに跨またがり、らんすゐ藍水ひたに浸ひたつて、
つゆしづくちりば露と雫を鏤したくさむぐらめ、はな下草きんの葎とりおのづから、むし花うきぼり、禽むし、鳥うきぼり、虫うきぼりを浮彫うきぼりし
せんたるし氈せんを敷く。

せん氈うへの上を、けいりう溪流そくは灌そくぎ、じどうしゃ自動車さかのぼは溯さかのぼる。
みづうみ湖でんだうの殿堂こゝろざを志きよくせつす、きよくせつ曲かぞ折算いとまふるに暇いとまなき、ながこの長らうかい廊下らうかは、

五町右に折れ、十町左に曲り、二つに岐れ、三つに裂けて、次第
 々々に奥深く、早きは瀬となり、静なるは淵となり、奔るは湍
 となり、巻けるは渦となつて、喜ばせ、樂ませ、驚かせ、危から
 せ、ヒヤリとさせる。目の前に、幾処か、凄じき扉と思ふ、
 大磐石の階壇は、瀧を壇の数に落しかけ、落つる瀧は、自
 動車を空へ釣る。

呪なく、券なきに、この秘閣の廊下、行く処、扉おのづから開
 け、柱来り迎ふる感がある。

— 惟ふに人は焼山をすぎて、其第一の扉展くとともに、心
 慄くであらう。車の轍を取つて引くものは、地でなく、草でなく、
 石でなく、森の壁を打つて、巖の柱に砕くる浪である。衝き入る

自動車は、瀬にも、淵にも、瀧にも、殆ど水とすれ／＼に、いや、寧ろ流の真中を、其のまゝに波を切つて船の如くに溯るのであるから。

巖の黒き時、松明は幻に照し、瀬の白き時、釣舟草は窓に揺れた。

全体、箱根でも、塩原でも、或は木曾の棧橋でも、実際にしろ、絵にせよ、瑠璃を灌ぎ、水銀を流す溪流を、駕籠、車で見て行くのは、樵路、棧道、高い処で、景色は低く下に臨むものと思つて居たのに、繰返していふが、此の密林の間は、さながら流に浮んで飛ぶのである。

もとより幾処にも橋がある。皆大木の根に掛り、巨巖

の膚はだへうがを穿うつ。其その苔こけむす蒸らす欄らんかん干はを葉はがくれに、桁けたを蔦つたづる蔓で埋う
 めたのが、前途ゆくてに目めを遮さへぎるのに、橋はしの彼方かなたには、大磐だいばんじやく石やくに堰せ
 かれて、急流きうりうと奔湍ほんたんと、左ひだりより颯さつと打うち、右みぎよりと潜だうくり、
 真中まんなかに狂立くるひたつて、巖いはほの牡丹ぼたんの頂いたゞきに踊をどること、藍あゐと白しろと紺こんじや
 青うと三頭とうの獅子ししの荒あるゝが如ごときを見みるとせよ。角度かくどを急きうに曲まがつ
 て、橋はしを乗のる時ときを思おもはれよ。

釣りぶねさう
 釣舟草つりふねさうは浮ういて行ゆく。

なか
 中なかに一所ところ、湖神こしんが設もうけの休憩所きうけいしよ——応接間おうせつまとも思おもふのを視み
 た。村雨むらさめ又また一時しきりはらくと、露つゆしげき下草したぐさを分わけつゝ辿たどると、
 藻もを踏ふむやうな湿しつじゆん潤みぎはな汀なみぎはがある。森もりの中なかを平地ひらちに窪くぼんで、居ゐ
 る処ところも川幅かははも、凡およそ百畳敷ぜふじきばかり、川かはの流ながが青黒あをぐろい。波なみ、

波なみは、一面めんに陰鬱いんうつに、三角かくに立つて、同じやううごに動いて、
 鱗うろこのざわくと鳴るな状さまに、蝶螈るもりの群るむらが状さまに、寂然せきぜんと果はてしなく流なが
 れ流るながゝ。

寂さびしく物凄ものすごさに、はじめこしんて湖神へんえいの片影せつに接おもひした思おもひがした。

三方ぼうは、大巖おほい磐びたゞ夥かさなしく累かさなつて、陰惨いんさん冥々めいめいたる樹立こたちの茂しげみは、
 根ねを露呈あらはに、石いしの天井てんじやうを蜿うねり装よそほふ——この椅子いすは、横倒よこたふ
 れの朽木くちきであつた。

鱗うろこの波なみは、ひたくと装もりあが上たかつて高く打うつ。——所謂いはゆる「石いしげ
 ど」の勝しょうである。

馬うまの洞どう中なかほどの石いしの、大榎おほかし、古槻ふるつきの間あひだに挟はさまつて、空そらに架か
 つて、下したが空洞うつつに、黒鱗こくりんの淵ふちに向むかつて、五七人にんを容いるべきは、

応接間の飾棚である。石げどはこの巖の名なのである。が、魔の棲むべき岩窟を、嘗て女賊の隠れ家であつたと言ふのは惜い。……

隣郷津軽の唐糸の前に恥ぢずや。女賊はまだいゝ。鬼神のお松といふに至つては、余りに卑しい。これを思ふと、田沢湖の街道、姫塚の、瀧夜叉姫が羨しい。が、何だか、もの欲しさうに、川をラインとか呼ぶのから見れば、この方が遙にかしい。

雲は黒くなつた。淵は愈々暗い。陰森として沈むあたりに、音もせぬ水は唯鱗が動く。

時に、廊下口から、扉の透間から、差覗いて、笑ふが如く、

聾しむが如ごとく、ニタリ、ニガリと行やつて、彼方あち此方こちに、ぬれくと
 青あをいのは紫陽花あぢさゐの面かほである。面かほでない燐火おにびである。いや燈籠とうろうで
 ある。

しかし、十和田わだ一帯たいは、すべて男性だんせい的てきである。脂粉しふんの気きの少すくな
 い処ところだから、此この青あをい燈籠とうろうを携たづふるのは、腰元こしもとでない、女をんなで
 ない。

木魅こだま、山魅すだまの影かげが添そつて、こゝのみならず、森もりの廊下らうかの暗くらい処ところ
 としいへば、人ひとを導みちびくが如ごとく、あとに、さきに、朦朧もうろうとして、
 頭あちはれて、萼がくの角切籠かくきりこ、紫陽花あぢさゐの円燈籠まるとうろうを幽かすかに青あをく聯つらねるの
 であつた。

釣舟草つりふねさうは浮ういて行ゆく。

たきびまぼろしとも
焚火は幻に燈れて続く。

くるまさいうてとゞ
車の左右に手の届く、
数々の瀧の面も、裏見る姿も、
燈籠
ともしみつりぶねさう
の灯に見て、釣舟草は浮いて行く。

たきある
瀧のその或ものは、雲にすぼめた瑪瑙の
大蛇目の傘に、
激
うしほお
流を絞つて落ちた。また或ものは、
玉川の布を繫いで、
中空
ほそか
に細く掛かつた。その或ものは、
黒檀の火の見櫓に、
星の泡
みなぎ
を漲らせた。

かははゞばい
やがて、川の幅一杯に、
森々、
涼々として、
却つて、
また
おと
音もなく落つる銚子口の大瀧の上を渡つた時は、
雲もまた晴
は
れて、
紫陽花の影を空に、
釣舟草に、
ゆらくくと
乗心地も夢
おも
かと思ふ。……橋を這つて、
はつと見ると、
こゝに
晁々とし

滑らかなる珠の姿見に目が覚めた。

湖の一端は、舟を松蔭に描いて、大弦月の如く輝いた。

水の光を白砂にたよつて、子の口の夕べの宿に着いたのである。

「御馳走は？」

「洋燈。」

といつて、私はきよとりとした。——これは帰京早々お訪ねに預かつた緑蝶夫人の間に答へたのであるが——実は子の口の宿が洋燈だったので、近頃余程珍しかった。それが記憶に沁みてゐて、うつかり口へ出たのである。

洋燈も珍しいが、座敷もまだ塗立ての生壁で、木の香は高し、

高縁たかゑんの前まへは、すぐに檜かし、槐つぎの大木大樹たいぼくたいじゆ鬱然うつぜんとして、樹きの根ねを繞めぐつて、山清水やましみづが潺せん々と音おとしづかながを寂さびに流ながれる。……奥入瀬おいらせの深林しんりんを一処ところ、岩窟いはむろへ入はいる思おもひがした。

さて御馳走ごちそうだが、その晩ばんは、鱒ますのフライ、若生茸わかおひたけと称となふる、焼麩やきふに似にたのを、てんこ盛もりの椀わん。

「ホツキ貝がひでなくつてよかつたわね。」

「精進しやうじんのホツキ貝がひですよ。それにジャガ芋いもの煮にたの。……し
かしお好み別このべつ、逃あつらへで以もつて、鳥とりのブツ切ぎりと、玉葱たまねぎと、凍豆腐こざりどうふ
を大皿おほざらに積つんだのを鉄鍋てつなべでね、湯ゆを沸立わきたたせて、砂糖さとうと醬しやう
油ゆをかき交まぜて、私わたしが一ちよつと寸あんばいお塩梅しほをして」

「おや、気味きみの悪わるい。」

「可、と打込んで、ぐらくくと煮える処を、めいぐと盛り、フツ

フと吹いて、」

「山賊々々。」

と冷かしたが、元来、衣裳鞆の催促ではない、ホツキ

貝の見舞に來たのだから、先づ其次第を申述べる処へ……又

近処から、おなじく、氷砂糖、梅干の注意連の女性

が來り加はつた。次手だから、次の泊の休屋の膳立てを紹介

した。鱧の塩やき、小蝦のフライ、玉子焼、鱧と芙蓉の葛かけ

の椀。——昼と晩の順は忘れたが、鱧と葱の玉子綴、鳥のスチ

ウ、鱧のすりみと椎茸と茗荷の椀。

「鱧、鱧、鱧。」

「ますく／＼出ます。」と皆で笑ふ。何も御馳走を食べに行く処ではない。景色だ、とこれから、前記奥入瀬の奇勝を説くこと一番して、此の子の口の朝ぼらけ、汀の松はほんのりと、島は緑に、波は青い。縁前のついその森に、朽木を啄む啄木鳥の、青げら、赤げらを二羽視ながら、寒いから浴衣の襲着で、朝酒を——当時、炎威猛勢にして、九十三度半といふ、真中で談じたが、

「だからフランネルが入つてゐるぢやありませんか、不精だね。」と女房めが、風流を解しないこと夥しい。傍から、

「その為の鞆ぢやあないの。」

で、一向に涼しきなんぞ寄せつけない。……たゞ棧橋から、水

づぎは 際から、すぐ手で掬へる小瑕の事。……はじめ、羽の薄い薄
 えぎの 蕨黄の蟬が一疋、波の上に浮いて、動いてゐた。峨峰、嶮山
 に 囲まれた大湖だから、時々 颯と霧が襲ふと、この飛んでる
 のが、方角に迷ふうちに羽が弱つて、水に落ちる事を聞いてゐ
 た。——上げてやらうと、杖で、……かう引くと、蟬の腹に五つ
 ばかり、小さな海月の脚の様なのが、ふらくとついて泳いで寄
 る、食つてゐやがる——蝦である。引寄せても遁げないから、密
 と手を入れると、尻尾を一寸ひねつて、二つも三つも指のさき
 をチヨ、チヨツと突く。此奴と、ぐつと手を入れると、スイと掌
 に入つて来る。岩へ寄せて、ひよいと水から取らうとすると、ア、
 撥つたい、輪なりに一つピンと刎ねて、ピヨイとにげて、スイと

泳いで、澄ましてゐる。小雨のかるやうに、水筋が立つほど、
 幾らでも、といふ……半から、緑蝶夫人は氣を籠めて、瞳を寄
 せ、もう一人は掌をひらく動かし、じりりと卓子台に詰寄
 ると、第一番に食意地の張つてる家内が、もう、襷を掛けたさう
 に、

「食べられるの。」

「そいつが天麩羅のあげたてだ。ほかくだ。」

緑蝶夫人が、

「あら、いゝ事ねえ、行きたくなつた。」

「私……今からでも。」

度し難い！ 弱つた。教養あり、識見ある、モダンとかど

うらやま
羨しい。

読者よ、かくの如きは湖の宮殿に至る階の一段に過ぎない。
 其の片扉にして、写し得たる一景さへこれである。五彩の漣
 は鴛鴦を浮か、沖の巖は羽音と、もに鶉を放ち、千仞の断崖の
 帳は、藍瓶の淵に染まつて、黒き蝶蝨の其の丈大蛇の如きを沈
 めて暗い。数々の深秘と、凄麗と、莊嚴とを想はれよ。
 ——いま、其の奥殿に到らずとも、真情は通じよう。湖神
 のうけ給ふと否とを料らず、私は階に、かしは手を打つた。
 ひそかに思ふ。湖の全景は、月宮よりして、幹紫に葉の碧
 なる、玉の枝より、金色の斧で伐つて擲つたる、偉なる胡桃の

実^みの、割^{われ}目^めに青^あい露^{つゆ}を湛^たへたのであらう。まつたく一寸^{ちよつと}胡桃^{くるみ}に似^にて居^ゐる。

(完)

青空文庫情報

底本：「新編 泉鏡花集 第十卷」岩波書店

2004（平成16）年4月23日第1刷発行

底本の親本：「日本八景」鉄道省

1928（昭和3）年8月1日

初出：「東京日日新聞 朝刊第一八三五一号〜第一八三五九号」

東京日日新聞社

1927（昭和2）年10月1日〜9日

「大阪毎日新聞 夕刊第一五九五〇号〜第一五九五三号、

第一五九五五号〜第一五九五九号」大阪毎日新聞社

1927（昭和2）年10月13日～16日、18日～22日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「十和田湖《とわだこ》」となっています。

※初出時の署名は「泉鏡花」です。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年8月31日作成

2016年9月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十和田湖

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>